大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

斐文会特別講座「源氏物語の千年」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 婦久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005069

斐文会特別講座「源氏物語の千年」

清水婦久子

はじめに

今年二〇〇八年は、源氏物語のことが『紫式部日記』に記されてちょうど千年ということで、源氏物語千年紀と称して、各地でさまざまなイベントが行われました。その中でおそらくもっとも大きい企画が、京都文化博物館で開催された「源氏物語千年紀展」だと思います。大阪女子大学元学長の片桐洋一先生を委員長として、藤本幸一氏を副委員長、徳川美術館の四辻秀紀氏、五島美術館の名児耶明氏、そして私、京都文化博物館の学芸員を企画委員として、二〇〇六年八月から話し合いがもたれました。企画委員会では、展示内容・展示方法などの大枠を決め、「源氏物語大展」と仮称されたものが最終的に「源氏物語千年紀展」となり、二〇〇七年の秋に、本格的な準備期間に入りました。

図録の作成にあたっては、文化博物館学芸員の野口剛氏と私とで、具体的な展示構成と図録の内容を協議し、片桐委員長にご相談しながら詰めていきました。源氏物語の世界をどのように一般の方々に伝えるのか、物語内容を美術作品を用いて具体的な「場面」として示すにはどうするかを何度も協議しました。展示作品の中には、物語の場面が特定しにくいものもあり、これまで細かい所については不明のまま紹介されてきたものもありましたので、絵画を専門とする野口氏と源氏物語を専門とする私とで、何度も何度も話し合いしメール交換し、図録のレイアウトや物語場面の絵の解説を確定しました。

こうした作業の中で確信したことは、源氏物語の風景と和歌が、多くの絵画作品を生み出し、その絵画作品があったからこそ、源氏物語が長く人々に愛されたのだ、ということです。絵画を扱う場合、多くは源氏物語のストーリィと重ね合わせて説明される例がこれまで多く見られました。たとえば晩年の光源氏を描いた絵において、過去の罪を思い苦悩する源氏などといった説明も成されています。しかし、それぞれの絵の画面と詞書

を丁寧に鑑賞すると、一つの場面を忠実に描き、その場面の前後で詠まれた歌を表している例が圧倒的に多いことがわかります。また、私達は安易に「伝統的な源氏絵」などと言いますが、それは一定の様式を繰り返し描いた同じ構図・図様の現存作品が多く、それを見る機会が多いからに過ぎません。そうした様式化された絵が伝統の上に成り立っているものかどうかも実は不明なのです。

そこで、本講座では「源氏物語千年紀展」と、やはり私自身が企画に関わりました秋の展示「読む、見る、遊ぶ　源氏物語の世界」に展示された作品（本稿では＊・＊世界として各図録の作品番号を示した）をスライドでご紹介しながら、お話させていただきます。また、会場の前方には府大の図書館でお借りしました版本を並べてありますから後ほどご覧ください。それとは別に、資料に挿絵を掲載しました「絵入源氏」をはじめ、私自身の本も何冊か持参しましたので、こちらはお手にとってご覧いただきます。

一、源氏物語の風景と絵画

大阪女子大学の学部時代、私は「源氏物語における『六条院』の存在」という曖昧な題名の卒業論文を書きました。二年前、大阪女子大学が府大に統合されるということで、その手書きの拙い卒論が、ちょうど三〇年ぶりに手元に戻ってまいりました。図書館に置かれているのが恥ずかしかったのでほっとしましたが、それをあらためて読み直しますと、そこには拙いながらも自分の研究の原点があると思いました。その卒論以来、私が源氏物語の最大の魅力として常に意識し続けていましたのは、季節と自然の風景と人の心との関わりが豊かに描かれていることです。初期の論では「自然描写」と書いていましたが、単なる「自然」（天然の意味）ではなく、人の心がとらえた「風景」こそが源氏物語の特色であると思い至り、大学院の雑誌「百舌鳥国文」に初めて投稿した論文は「源氏物語の風景」という題でした。二十編ほどの拙論を書き直して収めた拙著の題も『源氏物語の風景と和歌』としました。平凡な書名ながら、意外にも同じ題の書物はなく、大量に発表される源氏物語研究においても、もっとも一般的普遍的なテーマと思われる風景論・和歌論の比率は決して多くはありません。

その研究の意義を特に実感しましたのは、源氏物語成立から今日までの千年間の享受の歴史とそれを示す具体的な作品に接した時です。源氏物語を見習うべき「古典」と位置づけた藤原俊成・定家もまた、源氏物語の風景と和歌を高く評価していま

した。多くの絵画作品もまた、絵にしやすい美しい光景だけではなく、人の心を表す風景に注目し、登場人物の詠んだ歌の題材を絵の中に描いています。源氏物語が千年もの間、とぎれることなく多くの人々に愛され続けたのは、その風景と和歌が優れていたからではないでしょうか。

1．須磨の風景と和歌

名文として名高い須磨巻の風景を見てみましょう。

前栽の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひてたたずみたまふ御さまのゆゆしう清らなること、所がらはましてこの世のものと見えたまはず。白き綾のなよよかなる紫苑色などたてまつりて、細やかなる御直衣、

図①「絵入源氏」須磨巻

帯しどけなくうち乱れたる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかによみたまへる、また世に知らず聞こゆ。沖より舟どもの唄ひののしりてこぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも、心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、かぢの音にまがへるをうちながめたまひて、涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき、黒き数珠に映へたまへるは、ふる里の女恋しき人々の心、みなぐさみにけり。

（源氏）初雁は恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

舟歌や雁の声など、音の風景で、海辺の暮らしの寂しさを語っています。この場面を忠実に描いたのが、図①の「絵入源氏」（＊102＊世界27参照）挿絵です。本文の傍線部が絵に描かれたもの、波線は音の風景です。源氏は沖の舟の音や雁の声を聞いてそちらを眺めます。お供の人には源氏の姿やお経を読む声と、沖の舟や雁とが奥行きのある映像となって見えています。遠景として小さい舟、上空に連なる雁を描き、それを庭の前栽でつないでいます。雁は大きすぎますが、源氏とお供の人達三人がそれぞれ望郷の思いを雁に託して歌に詠みますので、それを強調する意図もあったのでしょう。これと同じ場面を描いた美術作品には、他に、土佐光起『源氏物語図屏風』（福岡市美術館＊24）や

伝土佐光吉および狩野氏信の『源氏物語五十四帖屏風』（＊2＊3）などがあります。

2．後世の評価

源氏物語の風景は、単なる自然描写ではなく、登場人物の心情と重なる心象風景となっています。そしてこれが歴史的に高く評価されるようになります。「古典」というのは、単なる古文ではなく、典拠となる規範とすべき作品を言いますが、源氏物語が「古典」として確立されるためには、後世の人の評価がなければなりません。古典文学の多くは、十三世紀の初めに藤原定家などが中心となって評価し書写し伝えてきたものなのです。定家が選んだとされる百人一首には、次の歌があります。

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守

（百人一首、源兼昌）

実は、この歌は私が最初に覚えた歌なのですが、淡路島と須磨とを行き来する千鳥の声が聞こえ、毎晩のように目覚めて寂しい夜を過ごす、という映像がありありと浮かんでくる名歌です。これは源氏物語の、

友千鳥もろ声に鳴く暁は一人寝覚めの床もたのもし

（須磨巻）

という歌に倣って作られています。源氏が孤独感を詠んだ歌ですが、これを兼昌は関守の独り寝のわびしさに置き換えて詠んだのです。また、定家自身は、兼昌歌と右の須磨巻の歌を基にして次の歌を作りました。

旅寝する夢路はたえぬ須磨の関かよふ千鳥の暁の声

（拾遺愚草、上、藤原定家）

さらに、三首目の、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

（新古今集、秋上、藤原定家）

は、定家が自ら新古今集に入れた歌ですが、これも須磨の風景を基にした歌としてよく知られています。

定家の父俊成は、当時の歌壇に絶大な影響を与えた歌の大師匠ですが、その俊成は、

源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり　（六百番歌合、判詞）

という名言を残しています。「六百番歌合」という宮廷行事で判者を務めた俊成は、源氏物語の歌に詠まれたことばを知らずに批判したグループの歌を負けと判定しました。この発言は歌詠みたちに大きな影響を与え、以後、源氏物語は歌詠みによって長く尊重され続けます。その前に俊成が言った、

紫式部、歌詠みのほどより、物書く筆は殊勝なり

（六百番歌合、判詞）

ということばも、ただ紫式部が歌人としてより小説家としてすぐれている、という意味ではありません。これは、紫式部が日常生活の中で詠む歌よりも、物語の中で風景を作り登場人物に歌を詠ませる創作こそが勝っていると評価したものなのです。

俊成もまた、須磨の風景を歌に詠んでいます。俊成自身が選んだ勅撰集・千載集には、次の二首、

須磨の関有明の空に鳴く千鳥かたぶく月はなれもかなしき

（千載集、冬、藤原俊成）

浦伝ふ磯の苫屋のかぢ枕ききもならはぬ浪の音かな

（千載集、羇旅、藤原俊成）

が入れられ、定家が選んだ新勅撰集には、父・俊成の詠歌、

月きよみ千鳥なくなり沖つ風ふけひの浦の明け方の空

（新勅撰集、冬、藤原俊成）

が入っています。俊成・定家父子は、源氏物語のことばや表現をいたずらに模倣してはいけないと歌人たちに厳しく諭しています。しかし、須磨の歌については、これだけよく似た歌を作っているのです。それだけ源氏物語の須磨の風景を高く評価し、積極的にその方法に学び詠歌の題材にしていたことがうかがえます。

源氏物語がすぐに世に認められたことは『紫式部日記』の記事からもわかりますが、それだけでは千年もの間綿々と伝えられるものではありません。源氏物語の風景を、歌詠みがまず評価し、歌を尊重する文化の中から絵が描かれました。平安時代から江戸時代まで、歌は常に文化の中心にありました。源氏物語はどんな時にどんな歌を詠めばよいのかを教えてくれる歌詠みの手引き書であったと考えてよいでしょう。源氏物語を題材にした絵を見ると、その多くが歌を詠む場面であることに気づきます。歌がない場合は、必ずポイントとなる「ことば」に焦点が当てられています。絵師は、ただ美しいから源氏物語の風景を描いたのではなく、物語の登場人物の心を表す風景として、物語のことばや歌に注目して描いたのです。博物館に展示されるさまざまな美術作品を鑑賞する場合、源氏物語のことばや歌、そしてそこに込められた心情に注意してご覧ください。すると、源氏物語が千年間も愛され続けた理由がおわかりになると思います。

3．宇治の風景と和歌

絵画に描かれた名場面では、たびたびすぐれた歌が詠まれています。そして同時に、その歌のことばが物語の巻名になって

いる例が多いのです。浮舟巻の名場面を見てみましょう。

いとはかなげなるものと明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、はるかならむ岸にしもこぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるも、いとらうたしとおぼす。有明の月すみのぼりて水の面もくもりなきに、「これなむ橘の小島」と申して、御舟しばしさしとどめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木のかげ茂れり。「かれ見たまへ、いとはかなけれど、千歳も経べき緑の深さを」とのたまひて、

図②「絵入源氏」浮舟巻

(匂宮) 年経ともかはらむものか橘の小島の崎にちぎる心は

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

(浮舟) 橘の小島の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

この歌によって浮舟と呼ばれる女君と匂宮が対岸の別荘に小舟で渡ります。女はこれまで、宇治川に浮かぶ小舟を「いとはかなげと明け暮れ見出して」きました。匂宮に誘われて、その小舟に乗り込みますが、こんなことに慣れていません。泳げるはずもありませんから、心細くて匂宮にひしと抱かれます。そんな女を匂宮はかわいいと思います。有明の月が明るくさして水面を照らし、船頭が「これなむ橘の小島」と言ったのを見ると、小島の橘の常緑樹が青々と見えます。匂宮は、「年経ともかはらむものか」と、その緑の深さに託して永遠の愛を誓います。かたや浮舟は「橘の小島の色はかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ」と、緑の色は変わらずとも、このよるべない浮舟の行方はわかりませんと、はかない小舟に託して我が身の不安定な境遇を詠みました。図②の「絵入源氏」(＊世界27参照)や『十帖源氏』(＊世界28参照)ほか、版本の挿絵でもこの場面を描いているのは、絵画的な場面というだけでなく、二人のそれぞれの心情が風景と和歌で端的に表されていることもあるのでしょう。

この場面を描いた絵画は非常に多く、「源氏物語千年紀展」に展示された作品だけでも、伝光吉および狩野氏信の『五十四帖屏風』(＊2＊3)、土佐光則画『源氏物語画帖』(＊73)、岩佐又兵衛『和漢故事説話図』(福井県立美術館＊46)、清原雪信『源氏物語図』(板橋区立美術館＊47)などでも、上空に有明の月、雪の

かかった橘の小島、小舟に二人の姿が共通して描かれています。異なるのは、船頭や女房が描かれているかどうかという点だけです。この図は、後の浮世絵でも好まれます。京都文化博物館の秋の展示「読む、見る、遊ぶ　源氏物語の世界」展に出されました三代歌川豊国による三枚組の大判錦絵『源氏物語浮舟図』（＊世界75）や、それを見立て絵にした作品（＊世界94）にも見られ、多くの浮世絵にこの図様が継承されます。

以上のように、源氏物語のすぐれた風景（情景）と和歌が、多くの美術・文学を生み出したと考えてよいでしょう。具体的には、『源氏物語千年紀展』図録の、五十四帖屏風解説・総論・コラム・名場面鑑賞・源氏物語和歌（抄）などにも数多く例示しましたのでご覧ください。また、今回の展示には出ませんでしたが、国宝『源氏物語絵巻』（徳川美術館・五島美術館）も、和歌を尊重して詞書を選び絵画化した作品です。他にも源氏物語には数多くの名場面があります。その中から好きな場面を選んで鑑賞するだけでも良いと思います。絵師たちも源氏物語の中から名場面を選んで描く楽しみを見出しました。源氏物語を読んで感動するだけでなく、芸術家や歌人や作家たちは、その感動から新しい作品を次々と生み出してきました。源氏物語には、表現者たちの創造性をかき立てる力があります。それこそが源氏物語が千年間も伝えられてきた理由ではないでしょうか。

（第一部終了）

休憩時間には、府大でお借りしてきました版本の展示をご覧ください。これらは、「源氏物語千年紀展」で実際に展示された原本です。同じ本の別の巻々が、いま図書館でも展示されていますので、そちらでもご覧ください。このあとのお話では、配布資料・スライドとともに図書館の展示目録も使用します。

二、大阪女子大学の蔵書と源氏物語研究

1．「源氏物語千年紀展」と版本

源氏物語千年紀と言うと、千年も昔にこのような長編・名作が作られたことを素晴らしいという評価が成されます。そのことは確かに素晴らしいことですが、千年前の作品がたまたま残ってきたというわけではありません。千年もの間、人々は忘れることなく源氏物語を常に愛し、さまざまな形で後の世に伝えてきました。「源氏物語千年紀展」において、国宝・重文を一箇所に集めた意義はもちろん大きいのですが、それとは別に、今回の展示の大きな特色は、古い時代の美術品や貴重な資料を展示するだけでなく、古典・源氏物語を現代にまで伝えてきた

近世の大衆文化をも広く紹介したことです。私はかねて、源氏物語が近現代の人々の手に渡る過程を研究してきました。源氏物語の近代的研究が大成されるためには、古典文学研究において従来軽視されてきた近世の享受を明らかにしなければならないと考えてまいりました。

そもそも古典文学における享受については、片桐洋一先生が研究してこられました。嵯峨本伊勢物語や『仁勢物語』、そして整版本など、近世における享受史についても、近世文学専門の研究者が敬服されるお仕事をされています。そして源氏物語についても、学界に大きな影響を与えておられます。『湖月抄』に先立つテキスト『首書源氏物語』を初めて影印本の形で紹介すること、その巻末付録として、同時代の絵入り版本の挿絵を場面ごとに比較して解説をつけるという企画を提案し編集されました。源氏物語の絵入り版本についての研究としては、吉田幸一氏の『絵入本源氏物語考』(昭和六十二年、青裳堂書店日本書誌学大系)が広く知られていますが、影印叢書『首書源氏物語』(和泉書院、昭和五十五年〜)の刊行は、それより七年も早く、吉田氏が初めて「絵入源氏」についてお書きになった論文より数年も前のことです。まだ大学院生であった私は、片桐先生のご指導のもと、大阪女子大学に所蔵されていた源氏物語の絵入り版本をすべて調査し、『首書源氏物語』の丁数と挿絵の枚数とを数えて一覧表を作りました。また、影印本の版下のために、『首書源氏物語』原本の汚れやシミをチェックして写真を修正する下準備をしました。影印叢書『首書源氏物語』の編者は、総論・桐壺を片桐先生が編集なさった後、帚木巻以下は著名な研究者が分担して担当されましたが、巻末の絵入り本挿絵の解説は、全巻を私一人に任せてくださいました。

その具体的な成果は、拙著『源氏物語版本の研究』にまとめましたが、「源氏物語千年紀展」では、その研究に基づいて、近世において源氏物語がどのように享受されたのかを、実際の書物を展示する形で示しました。実際に展示をご覧になった方々は、最後のコーナーで版本ばかりが時代順に並べられた地味な展示に驚かれたことでしょう。これこそが、庶民の親しんだ源氏物語なのです。そして、この斐文会講座で訴えたかったのは、「源氏物語千年紀展」および「読む、見る、遊ぶ　源氏物語の世界展」の下地となった研究が、まさに、大阪女子大学を拠点として成されていた、という事実なのです。単に私個人の研究が大阪女子大学所蔵本でなされたということだけでなく、その資料を有効に用いる学問の伝統が大阪女子大学にあった、ということをお伝えしたいと思います。

2．『源氏物語絵詞』について

大阪女子大所蔵の源氏物語関係書といえば、『源氏物語絵詞』(＊77)が最も有名です。数ある源氏物語関係資料の中で、美術史・国文学の分野における必須文献とも言える貴重な資料です。今では、源氏物語展に必ず出展される資料ですが、これは、研究者が積極的に研究し紹介したからこそ世に出たものなのです。この書は、簡単に言えば、絵指示の書物です。宮内庁書陵部にも類書がありますが、それよりも詳しいのです。この資料の来歴を、『大阪女子大学五十年史』と玉上琢彌先生が「女子大文学」十九号にお書きになった文を参考にして一覧してみましょう。

昭和24年　府立大阪女子大学創設　平林治徳学長（国文学）・源豊宗（美術）ほか

昭和27年　『源氏物語絵詞』の購入　玉上琢彌（国文学）・境田四郎（国文学）ほか

昭和35年　清水好子「源氏物語絵画化の一方法―新資料「源氏物語絵詞」紹介―」（「国語国文」）

昭和39年　五島美術館「源氏物語―その文学と美術」展に出展　美術史の必読文献として認知

昭和42年　本学所蔵「源氏物語絵詞」複製（「女子大文学」国文編十九号）解説・玉上琢彌

昭和50年　京都国立博物館「源氏物語の美術」に出展　図録総説＝白畑よし・玉上琢彌

昭和52年　大学院創設　玉上琢彌・片桐洋一・橋本四郎・土田衛ほか　『大阪女子大学和漢書目録』

昭和58年　『源氏物語絵詞―翻刻と解説―』（大学堂書店）片桐洋一・大阪女子大学物語研究会編

この書は、昭和二十七年に（学科主任は境田四郎）購入され、昭和三十五年に、清水好子氏が源豊宗氏および玉上先生の依頼で調査し、京大の雑誌「国語国文」にその資料的価値を世に問いました。この論文は、後に清水氏の著書『源氏物語の文体と方法』（東大出版会、昭和五十五年）に収められ、広く知られています。この『源氏物語絵詞』が初めて展示されたのは、五島美術館の「源氏物語―その文学と美術」でした。そして昭和四十二年には、大学の紀要「女子大文学国文編」に原本の影印が掲載され、昭和五十八年には、片桐先生が当時の院生・卒業生とともに活字翻刻して『源氏物語絵詞―翻刻と解説―』を公刊され、研究者が利用しやすくなりました。もちろん、今回の「千年紀展」では、この『絵詞』を、重要な資料として展示・紹介しました（＊77）。いま図書館では、この原本が展示され、会場には、

その影印が掲載された「女子大文学国文編」を持参しましたので、ご覧下さい。

昭和五十年の春、京都国立博物館で開催された「源氏物語の美術」では、玉上先生も指導に当たっておられ、図録に総説をお書きになり、この『絵詞』も展示されました。このとき私も玉上先生の解説を受けながら拝見しましたが、国宝の『源氏物語絵巻』がすべて出展され、扇面法華経など、著名な美術品や工芸品が数多く展示されていたのが圧巻でした。昭和六十年には、片桐先生が指導に当たられた堺市博物館の「源氏物語の絵画」に『絵詞』が出展され、以後、『源氏物語絵詞』は大阪女子大学の貴重書の中で最も有名でよく参照・引用される文献となりました。源氏物語の享受、源氏物語の美術を論じる時には、国宝『絵巻』とともに必ず引き合いに出されます。その背景には、この文献を学術的に紹介されました清水好子・玉上琢彌・片桐洋一という三人の偉大な学者の研究があるのです。

3．源氏物語の版本

「源氏物語千年紀展」に出した版本は次の通りです。★は大阪女子大学蔵（現府立大学蔵）本、☆は架蔵本で、「千年紀展」に出た原本には、（　）内の＊作品番号のすぐ下に★☆をつけました。

1慶長中期（一六〇五頃）古活字十行本『源氏物語』（＊97）

2慶長末年（一六一〇頃）伝嵯峨本『源氏物語』（＊98＊世界26）

3元和九年（一六二三）版『源氏物語』（＊99）

①寛永正保（一六四〇頃）刊、無跋（むばつ）無刊記整版本「源氏物語」（＊100☆）

②a慶安三年（一六五〇）山本春正跋絵入版本「源氏物語」（＊102☆103＊世界27☆）…初の絵入り版本

b万治三年（一六六〇）横本、絵入版本「源氏物語」★…aの異版

c寛文（一六七〇頃）無刊記小本、絵入版本「源氏物語」★（＊120）…aの異版

③承応二年（一六五三）松永貞徳跋、版本『万水一露（ばんすいいちろ）』（＊101★）…初の注釈付テキスト・本文は①

④寛文十三年（一六七三）刊、一竿斎跋『首書（かしらがき）源氏物語』（＊104★）…初の頭注付テキスト・本文は②b

⑤延宝元年（一六七三）北村季吟跋『湖月抄』（＊105★）…①～④を結集したテキスト・本文は②a

1～3は古活字版と言う、木で作られた活字版です。せいぜい

数十部しか印刷しない希少価値の高い本で、貴族や武家への贈答品として作られたものと思われます。それに対して①以下は、庶民が手にすることができた整版本で、これは一枚板に版画形式で彫って印刷したものです。このうち①は、跋文も刊年もないので素性不明のため「素源氏」などと乱暴な呼び方がなされていた版本ですが、天理図書館や中之島図書館などの所蔵本や近世の書籍目録などを調査して、②の「絵入源氏」に先立つ寛永・正保頃に出版された最初の整版本と判断したものです。①以前の版本は、大阪女子大学にはありませんが、②以後の版本と、①と同時期の版かと思われるその他の古典版本が所蔵されていましたので、それらを一つ一つ手にとって調査した結果、源氏物語のみならず多くの古典版本の前後関係を特定することができました。

影印本『首書源氏物語』の巻末付録に使用した絵入り版本は、②のａｂｃと、次の⑦～⑫です。

⑥承応三年（一六五四）一華堂切臨跋『源氏綱目』（＊109）……過去の絵を批判し訂正した注釈書

⑦承応三年（一六五四）野々口立圃跋『十帖源氏』（＊107★＊世界28☆）…①を元にした絵入り梗概書

⑧明暦三年（一六五七）絵入り『源氏小鏡』★（＊世界151☆）…初の絵入り『源氏小鏡』

⑨万治三年（一六六〇）小島宗賢・鈴村信房『源氏餅鏡』（＊111★＊世界154）…⑧を簡略化した俳書

⑩寛文元年（一六六一）野々口立圃跋『おさな源氏』★（＊108＊世界29）……⑦を半分に簡略化した書

⑪貞享二年（一六八五）版『源氏大和絵鑑』（外題「新版源氏絵鏡」）（＊112★）

⑫寛文十二年（一六七二）松會版『おさな源氏』……⑩の異版★

一覧では、原則として初版の名称を挙げましたが、大阪女子大学所蔵本は、厳密には、刊記や版が異なるものもあります。②ａの「絵入源氏」の場合ですと、初版は無刊記ですが、大阪女子大学には、承応三年（一六五四）八尾勘兵衛の版が二種あり、それぞれ版式が異なります。一方（版式Ⅰ）は初版と同じで折り目に巻名と丁数があります。もう一方（版式Ⅱ）は後の刷りで、ノドの所に巻名記号と丁数が印刷されています。これは、承応三年に八尾勘兵衛から初めて市販された時の初刷りと、何年か後に版式を変えて出された後刷り本です。この二つの版式の八尾版を比較することによって、私は、吉田幸一氏の説の誤りに気づきました。そして、多くの版の調査を経て、「絵入源氏」の

初版は慶安三年（一六五〇）であると判断したのです。

また、私が編集を担当しました『首書源氏物語』絵合・松風二巻の本文を調査していた時に、②bの万治版横本「絵入源氏」の本文との一致に気づきました。それによって、④『首書源氏物語』の底本が②b万治本であることを明らかにしました。さらに、b万治本がa慶安本「絵入源氏物語」の海賊版であることも、本文および挿絵を比較してわかりました。次の表に、吉田説との違いを示しています。

		吉田説	清水説
ア	慶安本の初版	承応三年八尾勘兵衛版	無刊記本（慶安三年頃刊）
イ	初刷りと後刷り	版式Ⅱが初版、版式Ⅰが後刷り	版式Ⅰが初版、版式Ⅱが後刷り
ウ	万治本・無刊記小本	いずれも山本春正自身が改刻	それぞれ慶安本を模して別人が編集

その他の版本については、吉田氏の『絵入本源氏物語考』を参照し、影印本『首書源氏物語』巻末解説を訂正しました。女子大所蔵の⑨『源氏鬢鏡』は、京都で出版された万治三年跋本ながら、その再版に当たる天和三年（一六八三）版『源氏鬢鏡』（外題「源氏物語絵抄」）であること、無刊記の『源氏物語大概抄』は、⑩寛文元年跋『おさな源氏』の後刷り改題本であること、⑫寛文十二年（一六七二）松会版『おさな源氏』（女子大本は彩色の丹緑本）は、江戸版の『おさな源氏』であること、などです。このあたりの関係や出版状況などについては、「源氏物語の世界」展の図録巻末の源氏物語享受史年表にも示しておきました。

4．版本書誌学の調査研究

以上の版本の前後関係や影響関係は、個々の本文・挿絵・書誌など、細かい調査を経て独自に判定した結果です。が、この一覧があたかも自明のように引用される例も見受けられます（三田村雅子『記憶の中の源氏物語』新潮社など）。古活字版が（私の調査した）伝嵯峨本や元和本だけであるかのような記述や、「すべては絵入り本から始まった」という見出しなど、少なくとも近世初期の版本がどのように流布し伝来してきたのかを十分に考慮しないとらえ方が目につきます。これは東京を中心にした考えですが、江戸では、これらの版本のうち流布していたのが半数程度であったからという文化的状況が関係しているのかもしれません。①無跋無刊記本、②慶安三年「絵入源氏物語」の初版、③『万水一露』、④『首書源氏物語』といった本文全文

が掲載された五十四巻もの本が出回ることは少なく、十巻の⑦『十帖源氏』ですら、江戸で入手する機会が少なかったのかもしれません。『源氏物語』のテキストと言えば⑤『湖月抄』ばかりが流布し、『源氏小鏡』は、江戸で手軽に作られた鶴屋版や須原屋版、『おさな源氏』は初版ではなく師宣画の江戸版、そして江戸の庶民は『偐紫田舎源氏』によって源氏物語を知ったのではないでしょうか。『読む、見る、遊ぶ　源氏物語の世界』の展示図録に「模倣・転用の文化」というコラムを書きましたが、「江戸文化」では、京都で出版された版本を模倣し転用し、時に盗用して新しい出版物を作ることが一般的でした。現在の国文学においても、関西で地道な基礎研究がなされ、東京のマスメディアでは、派手な研究がもてはやされる風潮があります。私達が学んだ大阪女子大学の研究は、まさに関西らしい地道な基礎的研究を重視するものでした。

「絵入源氏」が四種類も揃っている図書館は決して多くはないでしょう。東大図書館に「絵入源氏」が入れられたのは、関東大震災以後の寄贈によるとのことであり、吉田氏が初版と誤解した「絵入源氏」の取り合わせ本は、なんとハードカバーで装丁してあります。これに対して、京大の図書館には数種類の「絵入源氏」があり、初版が二種類、うち「千年紀展」に展示した彩色の「絵入源氏」（＊103）もあります。それとは別に京大文学部閲覧室には、「絵入源氏」の異版である横本と小本も揃えられ、珍しい後刷りの出雲寺和泉掾版「絵入源氏」もあります。それは、ちょうど大阪女子大学に三種四版の「絵入源氏」がある様に似ています。京大に「絵入源氏」が入れられた時期と経緯は存じませんが、その光景に、私は大阪女子大の学統と深くつながるものを感じました。これだけの版本が大阪女子大にあることは、資料への理解ある先生方がおられたこと、それを有効に用いた研究をする学問の伝統があるからです。

「絵入源氏」と言えば、玉上琢彌先生の『源氏物語評釈』にすべての挿絵が掲載されていました。私が「絵入源氏」の存在を知ったのも、玉上先生のもとで卒業論文を製作している時に熟読した『評釈』の挿絵によってです。また同じ頃、土田衛先生のご指導のもとで、私たち学生は図書館の原本に当たって『大阪女子大学和漢書目録』の校正をさせていただきました。それまで、いくつかの版本を目にすることはできましたが、一度に多くの版本に接したのはそのときが初めてでした。当時の大学では、学生が図書館の貴重書に触れて勉強する機会がありました。

大阪女子大学における版本に関わる研究を、年代順に挙げて

みます。★は女子大本を利用したものです。

昭和39年　玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店）の各所に「絵入源氏物語」②ａの挿絵

この頃、順次、源氏物語の版本が多数購入・寄贈され、図書館の蔵書となる。

昭和55年～　片桐洋一編『首書源氏物語　総論・桐壺』以下、十六冊刊行（和泉書院）④の影印本★

※巻末付録に「江戸時代の『源氏物語』版本の挿絵」（清水婦久子）★②～⑫の挿絵比較と解説

平成元年　清水婦久子「版本『絵入源氏物語』の諸本（上）（下）」（『青須我波良』38・39）

※吉田幸一『絵入本源氏物語考』（昭和62年、青裳堂書店）の説の誤りを訂正★②ａ二種の版の相違より★②ｂｃ

平成5年～　清水婦久子編『絵入源氏』桐壺・夕顔・若紫（おうふう）②ａの活字テキスト

※国文学研究資料館原本テキストデータベース『源氏物語（絵入）［承応版本］ＣＤ-ＲＯＭ』（岩波書店）

平成15年　清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院）★①～⑫ほかの版本書誌学研究

資料は常に手元に置いて見る必要があります。大学院修了後は、母校に出向く機会も少なくなりましたし、図書館の貴重書を自由に閲覧できる環境ではなくなりましたので、版本を私費で購入しました。そのうちのいくつかは「千年紀展」「世界展」の両方に出しましたし、今日みなさんのお手にとっていただいたものも私個人のものです。和本の軽さ、丈夫さは、こうして直に触ってみなければわかりません。まして、本文を一字一句校合する作業や、版本の印刷の具合を確かめるためには、自分で買って持つのが一番です。平成5年の『絵入源氏』テキストは、架蔵本を用いて活字紹介したものです。

「絵入源氏」の価値は挿絵だけではありません。「絵入源氏」本文の写真（＊102 103＊世界27）をご覧いただきたいのですが、これまでの版本にはなかった読点や濁点、傍注が本文に初めてつけられたのです。これが④『首書源氏物語』（＊104）および⑤『湖月抄』（＊105）の底本になりました。活字テキスト『絵入源氏』には多くの本との本文校異を示したことで、「絵入源氏」の本文が近世流布本の基になったのだということが認知され、平成十一年には岩波書店から全巻の活字翻刻データがＣＤ-ＲＯＭとして出されました。このＣＤ-ＲＯＭの底本は国文学研究資料館の本ですが、資料館が持っていない別冊付録の画像は、「千年紀展」「世界展」にも出した架蔵本を撮影したものです。そして『源

氏物語版本の研究』では、大阪女子大本と架蔵本のほか、東大、京大、天理図書館、中之島図書館など、各地で調査した多くの源氏物語版本を扱っています。

5．書誌学的研究の重要性

「源氏物語千年紀展」のうち、近世の版本については私の研究に基づいて構成し、展示作品についても、調査したもので保存状態がよく、書誌・内容のわかっているものを選定しました。大阪府立大学には、先の『源氏物語絵詞』を借用する必要があり、大阪女子大に所蔵されていた版本についても書誌と保存状態を熟知しているので借用を依頼しました。しかし残念なことが二つあります。一つは、図録と展示においては、現在の所蔵者を記載するのが原則であるため、すでに統合されていた大阪府立大学学術情報センター図書館蔵と記載され、大阪女子大学の名前が出ないことです。もう一つは、野口氏が資料の撮影にセンター図書館に出向いたときに、図書館員が版本の判別に手間取り、約束の時間が何時間も延長されたことです。

前者の問題については、府大の言語文化学会会報に、展示および図録に大阪女子大学の名称のないことが博物館担当者の不手際であるとでも受け取れる発言が掲載されました。が、博物館は所蔵者からの情報に従ったに過ぎません。所蔵者の名称が変わったものを博物館が勝手に名称を変えて記載できるはずもありませんから。ただし、『絵詞』については、「大阪女子大本源氏物語絵詞」で学界に周知されていますし、片桐先生のお出しになった活字本も知られています。また、『万水一露』の見返しには、大阪女子大学の所蔵者印がありますが、それが「千年紀展」図録の写真（＊101）にも確かに見えます。大阪女子大学の名前は、こうして本が紹介されることによって記録にとどめられているのです。

後者については、博物館に出展する資料の撮影に際して図書館側が十分に資料を確認しておかなかったことが問題だと思います。三十年前、院生の私が『首書源氏物語』編集のために調査するからと大阪女子大学図書館にお願いしておくと、約束の日、当時の職員は、朝早くから準備して、確実に版本を全巻（一四〇冊ぐらいありました）揃えて、特別閲覧室に準備しておいてくださいました。もちろん片桐先生からのご指示があったのかもしれませんが、もともと司書志望であった私には、指針となる態度でした。大学図書館は昔と変わっているのかもしれませんが、そうした事がありながら、「源氏物語千年紀展」に展示されると、「本学図書館の所蔵資料が『源氏物語千年紀展』に出

ました」と宣伝し、同じ資料ばかりがあちこちに展示されます。『首書源氏物語』巻末の解説や「千年紀展」図録の解説がそのまま展示目録やキャプションに記載されているのを見るたびに複雑な気持ちがしています。

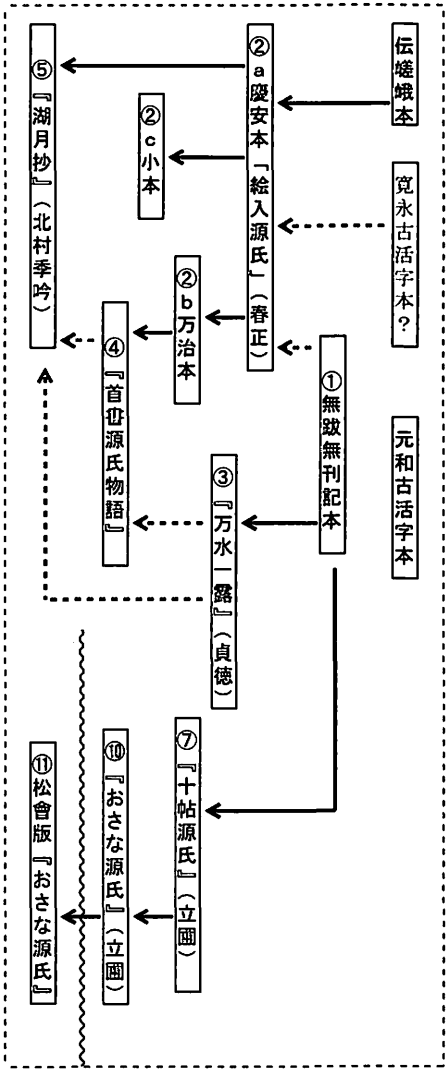
当然のことながら、資料は所蔵していることに意味があるわけではありません。『源氏物語絵詞』も、紹介者がいなければ埋もれていたでしょう。玉上先生が購入し、清水氏が紹介し、片桐先生が公刊し、ことあるごとに研究対象にされてきたからこそ、府大（大阪女子大）が誇る資料だと公言できるのです。「絵入源氏」、『十帖源氏』、『源氏大和絵鑑』などの絵入り版本は、それまで研究されたこともなく、『首書源氏物語』巻末で初めて紹介するときには、本の素性もわからず、手探りの状態で解説を書きました。何度も図書館に足を運び、版本を手にとって調査し、複写したものを各図書館に持ち込んでは比較し、本文を一字一句校合し、挿絵を照らし合わせ、それでようやく先の結論に至ったのです。図録の解説も次第に簡潔に書けるようになりました。研究の苦労をことさら言うことではありませんが、書誌学という地味な研究があって初めて資料は生きることを、ここであえて述べておきたいと思います。

さて、「源氏物語千年紀展」以前に、版本が博物館・美術館に展示された例としては、昭和六十一年の「源氏物語の絵画」（堺市博物館）と平成十七年の「絵画でつづる源氏物語―描き継がれた源氏絵の系譜」（徳川美術館）があります。前者では、『絵詞』のほかに、女子大所蔵の『十帖源氏』も初めて展示されました。また徳川美術館の展示では、珍しく同館所蔵の万治版「絵入源氏」が展示され、私の研究を踏まえて慶安本「絵入源氏」の異版である旨の詳しい解説があり、近世の美術史における版本の意義にも触れられていました。国文学および美術史の分野でも、版本がようやく研究対象とされるようになってきました。それでも、近世初期の源氏物語享受史研究はなお少なく、十八世紀以後の「江戸文化」の一環として扱われることが多いのは残念です。

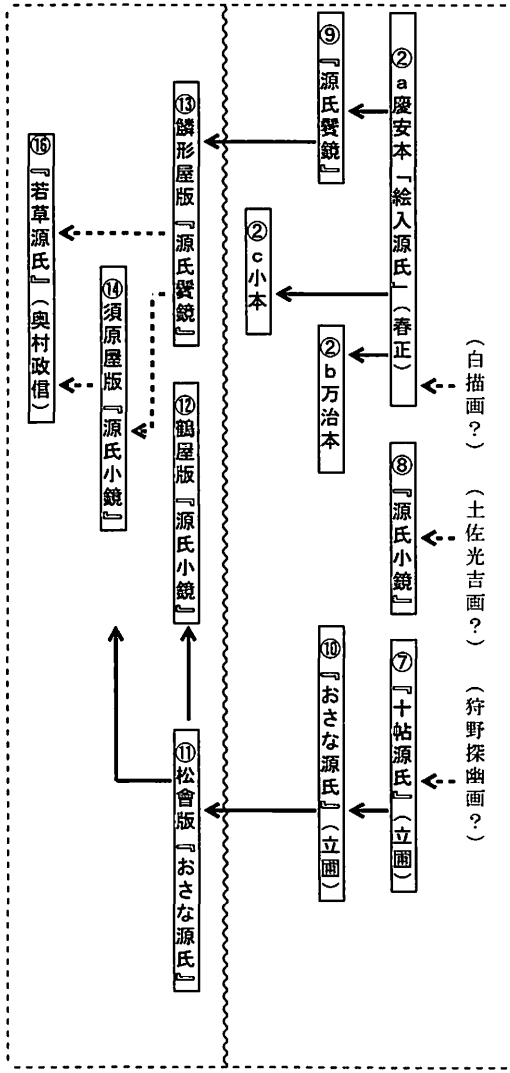
先ほどから紹介しておりますように、二〇〇八年秋には、早稲田大学名誉教授の中野幸一氏のコレクション「九曜文庫」など近世における源氏物語を中心として「読む、見る、遊ぶ　源氏物語の世界展」をしました。発案の藤本孝一氏を委員長として、中野氏を監修者、私も企画委員になりました。半年という短い準備期間ながら、学芸員の市川彰氏と私とで相談し、中野氏のご協力のもと、今度は近世絵画や版本から始まり、ダイジェスト版やパロディ本、そして浮世絵へと伝えられるエネルギッ

シュな近世の源氏文化を紹介することができました。前評判はそれほどではありませんでしたし、「千年紀展」のように入場者が多かった訳ではありませんが、ご覧くださった方々からは大変おもしろかったとの感想を多数いただきました。この展示にも、春の「千年紀展」以上に多くの版本を展示しましたが、こちらには大阪府立大学所蔵本は借用していません。ただ、その展示の背景には、三十年前に大阪女子大学図書館の館員に助けられ、素晴らしい教授のご指導のもと、大学院修了生が一つ一つの版本を調査し比較した書誌学の研究がありました。その成果は、この図録にも顕著に表れています。次の図は、図録にも掲載したものですが、これまで調査してきたことを基に作製した版本の本文系統と、挿絵の影響関係を図にしたものです。京

版本の本文系統図（推定）



絵入り版本の挿絵関係図



都・江戸とわけました通り、京都で編集・出版されたものが江戸に伝えられ、模倣・転用されて広く出回る様がよくおわかりになると思います。

（第二部終了）

三、和歌の解釈と版本研究

最初に映像で手間取りましたため時間がなくなりましたが、準備してまいりましたので、ここからは、お時間のある方のご

希望があれば、ということにします。いかがでしょうか。ではお話させていただきます。

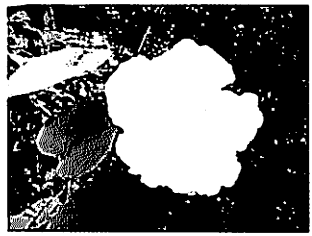
大阪女子大学において学んだことは、源氏物語は古代の物語であるから、現代小説のように読むべきではない、ということです。玉上先生は繰り返しそのようにお話しになり、片桐先生からも形を変えて教わりました。もう一つ、玉上先生がおっしゃったことは、仮説の上に仮説を立ててはいけない、ということでした。そして、片桐先生から徹底的に教えられたことは、研究は実証的でなければならない、ということでした。片桐先生の大学院の演習では、古今集の和歌を多くの注釈書とともに丁寧に読むというものでした。そのおかげで会得したことは、和歌を正しく読むための方法とともに、源氏物語もまた伝統的な和歌を踏まえて作られている、ということでした。そのことを実証的に論じたのが、拙著『源氏物語の風景と和歌』の第六章「光源氏と夕顔」です。

この論は、一見、物語の登場人物の性格や行動を論じたものと思われるでしょうが、初出稿では、「―贈答歌の解釈より―」という副題をつけて発表したものです。源氏物語の研究でもっとも初歩的かつ発表本数の多いのが、いわゆる「人物論」ですが、論文という形をとりながらも感想文の域を出ないものが大半で、実証的とはほど遠いものが目につきます。中でも、夕顔という女君を論じたものは、その詠歌に矛盾があるということから、さまざまに敷衍されてきました。まさに「仮説の上に仮説」が乗っている状態なのです。そこであらためて詠歌の表現を検討してみると、従来の説ではそもそも歌の解釈を間違っていた、という結論に至りました。その考えの基本となったのが、『湖月抄』以前のテキストである版本「絵入源氏」によって源氏物語を読むことであり、大学院で鍛えられた和歌の解釈方法でした。そのことをわかりやすく書いたのが、拙著『光源氏と夕顔―身分違いの恋―』（新典社新書）ですが、一般の読者および学生向けであるにも関わらず、源氏物語の専門家からも、やっと夕顔の歌について理解できたとの意見を多数いただきました。以下、その一端を簡単にお話しします。

1．夕顔巻の風景と和歌

夕顔という植物には二種類あります。一つは図③の写真、ヨルガオ科の観賞用の大輪のきれいな花を咲かせる夕顔、もう一つは、図④の写真、干瓢の材料になるウリ科の小ぶりの花です。ヨルガオ科の夕顔は江戸時代に入ってきたもので、平安時代の夕顔は、地味なウリ科の野菜の花です。枕草子にも、名前はよ

いが、実のありさまが良くないと書かれています。しかし、その花が咲いているとき、光源氏がたまたま目を留め、夏の暑い盛りでしたから、白い花が涼しげに思えて、あの花はなんだ、と聞いたことがきっかけで、この物語が始まります。



図③ヨルガオ

図④夕顔

少しさしのぞきたまへれば、……切り掛けだつものに、いと青やかなるかづらの心地よげにはひかかれるに、白き花ぞおのれ一人笑みの眉開けたる。「をちかた人にもの申す」とひとりごちたまふを、御随身ついゐて「かの白く咲けるをなむ夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」と申す。

図⑤「絵入源氏」夕顔巻

お忍びで通りがかった車の中から、源氏は白い花に目をとめます。垣根に青い蔓草が這いかかり、白い花がほほ笑むように咲いています。源氏は、「をちかた人に物申す」とつぶやきました。これは、古今集にある求婚問答歌、

※うちわたす遠方人にもの申すわれそのそこに白く咲けるは
何の花そも　（古今集、旋頭歌）

春されば野辺にまづ咲く見れどあかぬ花まひなしにただ名のるべき花の名なれや　（同返し）

の問いに当たる歌の一句です。警護の役人である随身が、これをすばやく察知し、歌のことばを用いて花の名を夕顔だと答えました。版本「絵入源氏」の挿絵（図⑤）では、源氏の方へ顔を向けて振り返った武官姿の男が随身です。半蔀を四五間上げて白い簾が涼しげな家からきれいな額つきの女達がのぞいています。

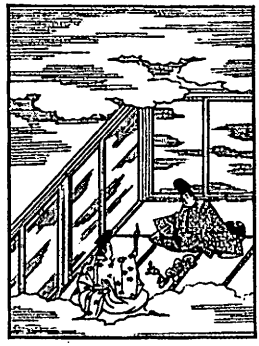
源氏は、随身の返事から、小さな家の軒先に咲く夕顔の花の運命に同情し、「口惜しの花の契りや、ひとふさ折りて参れ」と命じます。その様子を見て、家の中から少女が出てきて、白い扇を差し出し、「これに置きて参らせよ、枝も情けなげなめる花

を」と、随身に持たせます。源氏があとでその扇を見ると、そこには、控えめな美しい筆跡で歌が書いてありました。それが次の場面です。

惟光に紙燭召してありつる扇ご覧ずれば、もてならしたる移り香いと染みなつかしくて、をかしうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

そこはかとなく書きまぎらはしたるも貴はかにゆゑづきたれば、いと思ひのほかにをかしう覚えたまふ。



図⑥「絵入源氏」夕顔巻

夕暮れになったので、源氏は惟光に紙燭を持たせて先ほどの扇を見ます。「心あてにそれかとぞ見る……」と書かれた歌の内容はもちろん、白い扇のうつり香やそこはかとなく書かれた繊細な筆づかいにも、源氏は心惹かれます。

この「心あてに」の歌の解釈については、四種類もの説があります。

A説……本居宣長説（十九世紀）「夕顔」を源氏の顔とする説
→無礼な歌・夕顔娼婦説（円地文子）
あて推量にあの方―源氏の君かとお見受けします。白露がその輝きを増している夕顔の花―夕影の中の美しいお顔を（小学館日本古典文学全集『源氏物語』※新編全集ではB説に変更・（岩波新古典大系）

B説……『細流抄』説（十六世紀）宣長が文法的誤りを指摘→
女の性格矛盾・作者の失策（玉上）
こんな賤しい家に咲く風情のない夕顔の花に光彩を添えて美しく見せる白露の光、それは光の君と推し量られることでございます。（岩下光雄『源氏物語の本文と享受』・玉上琢彌『源氏物語評釈』・角川文庫）

C説……室町時代の一説（十六世紀）頭中将見間違い説→文法的誤りはB説と同じ・元夫を見間違うか
あて推量ながら、もしやあなた（頭中将）さまではありませんか。あなたさまの御光栄をいただいて、いやしき花の咲くこのあたりも光輝くようでございます。（黒須重彦『夕顔という女』『源氏物語私論』）

D説……室町時代の一説（十六世紀）源氏の問いに花の名を答えた歌→女の性格にも文法的にも合う

あて推量にその花かと見ています、白露（源氏様）の光が加わって真っ白に輝いている夕顔の花を。（清水婦久子『源氏物語の風景と和歌』・『光源氏と夕顔―身分違いの恋―』）

しかも、それぞれの説が夕顔という女性の人物像に深く関わっているのです。そのため、この歌の解釈については数多くの論文が書かれ、いまだに議論されています。が、それぞれの口語訳を読む前に、まず、素直にこの歌をそのまま受け止めてみましょう。

あて推量に「それ」かと見ています、白露の光が加わって
　いる夕顔の花を

となります。そして「それ」は、夕顔の花を指していると考えるのが自然です。また、白露の光とは、白い露の光を表すとともに、光る君と呼ばれた光源氏をたとえていること、野菜の花である夕顔はもちろん後に夕顔と呼ばれる女を示している、と考えられます。

ところが、この歌の口語訳を見ると、もっとも広く出回っているのが、A説で、なんと歌の「夕顔」を源氏の顔のこととしています。Bでは、Aと同じく、お忍びの源氏の正体を心あてに言い当てたとする説ですが、「それ」は「白露の光」を指すとしています。このB説は、江戸時代の終わりに本居宣長が文法的に間違っていると批判したもので、宣長はA説を主張し、これが近代以後の通説になりました。夕顔という女性は、物語で一貫して内気で控えめな女性だと語られていますが、この二つの解釈は、どちらも「あなたはもしかしたら光源氏さんでは？」と、身分を隠した貴公子の正体を推量した歌だとしています。従って、その歌の厚かましさと女の性格との間に矛盾が生じると指摘され、その矛盾を埋めるために、研究者は、作者の失策であるとか、この女性は一見内気で控えめに見せながら実は男性に対しては積極的だとか、挙げ句の果てに娼婦のような女であるとか、さまざまな説明を加えてきました。これに対して、C説では、女の恋人であった頭中将だと見間違えて歌を贈ってきたのだと主張しました。これには根強い支持者もいますが、BCともに「白露の光」を「それかと見る」としていますので、宣長の批判した文法的な誤りは解消できません。

いずれも一長一短ありますが、これらABC説の共通点は、歌を歌としてではなく単なるせりふとしてとらえ、口語訳によってつじつま合わせをしようとしていることです。源氏物語の歌は、古今集などの伝統的な歌の表現や発想を基にして作られています。このことは拙著『源氏物語の風景と和歌』全体で具体的に論証していますが、夕顔の歌も例外ではありません。そ

ここで私は、過去の議論とは別に、この歌が歴史的にどのような意味を持っていたのかを、一から考え直しました。方法は意外に簡単です。当時よく知られていた他の歌と比較すればよいのです。これこそ、大学院の古今集演習で同時代の歌の例を基にして正しい解釈を導いたのと同じ方法なのです。

2．白い花の風景

果たして「心あてに・それかとぞ見る」という句は、本当に、相手の正体を言い当てる意味なのでしょうか。同じ句を持つ歌を探すと、①～⑤の歌が出てきました。問題の「心あてに」の歌を右に並べて比較してみましょう。

○心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花（源氏物語・夕顔巻）……夕顔／白露の光

①心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花（古今集、秋下、凡河内躬恒）白菊／霜（白）

②心あてに見ばこそわかめ白雪のいづれか花のちるにたがへる（後撰集、冬、よみ人知らず）白梅／白雪

③梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば（古今集仮名序　拾遺集、柿本人麻呂）白梅／雪

④わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪のふれれば（万葉集、巻八　後撰集、春上、よみ人知らず）

⑤月夜にはそれとも見えず梅の花香をたづねてぞ知るべかりける（古今集、春上、凡河内躬恒）白梅／月光

①の歌は、百人一首で有名ですが、平安時代の人々が規範とした古今集の歌です。夕顔の歌と形が大変よく似ています。「心あてに」だけではなく、「白露の」と「初霜の」とが同じであることがおわかりでしょうか。露と霜はどちらも水滴で、どちらも白です。霜は白いからわざわざ「白霜」と言わなくてもよいのです。露はいろんな色を持つから「白露」と言いました。そして白菊の花、に対して、白い花と繰り返された夕顔の花、だから、夕顔の歌は、この躬恒の白菊の歌をもじって作られていることが明らかです。白菊の歌では、花に初霜が置いて惑わせる、菊の上に霜がかかっているために、どれが白菊なのかわからない、というのです。重陽の節句のため、朝の暗いうちに菊を折り取ろうとしたら、霜がかかっていたので、白い菊かどうか「置き惑わせる」と詠んだ歌なのです。それに対して夕顔の歌では、白露の光によって白い花が輝いてかえってよく見えません、と詠んでいるのです。

②の歌で「花」とあるのは白梅です。冬から春にかけて、花が咲いているのかと思えば白雪だった、雪が降っているからそ

れが白梅なのかわからない、と詠んでいます。だから「心あてに見ればわかる」と言います。③④では、「梅の花それとも見えず」という同じ句です。夕顔の歌の「それかとぞ見る」とは、この「それとも見えず」をひっくり返していたのです。「それとも見えず」では、雪が降っているから白梅がはっきり見えない、とあきらめているのに対して、②の歌では「心あてに」見ればわかる、と言っているのです。

⑤の歌は、②③④の白雪と白梅の歌を、月夜と白梅の歌に変えています。月夜の白い光に浮かび上がって見える梅の花を見分けにくいので香りで確かめようとしています。この歌を詠んだのは、①の白菊の歌と同じ凡河内躬恒です。躬恒は、古今集の選者であり、その仮名序に取り上げられた③の人麻呂歌などの白雪と白梅の歌を基にして、⑤で月夜と白梅、①で初霜と白菊の歌をそれぞれ作ったのです。

源氏物語の作者は、この躬恒の方法にならって白露の光と夕顔の歌を作りました。これらはすべて白い水滴や光にじゃまされて見分けがたくなった白い花の風景を詠んだ歌です。夕顔の歌は、これらの伝統的な歌を踏まえて作られていたのです。そして「白い夕顔の花をおおい隠すように、白露の光がかかっています」と、光源氏を「白露の光」に喩えて言ったのです。この女性の歌があまりにも高尚で、そのみすぼらしい住まいに似つかわしくないので、源氏は「いと思ひのほか」意外に思って強く興味を抱いたのです。

従って、D説、つまり私の口語訳では、「あて推量にその花かと見ています、白露（源氏様）の光が加わって真っ白に輝いている夕顔の花を」となります。この歌は、車に乗っている貴公子の正体を心あてに言ってきた歌ではなかったのです。むしろ源氏の正体は明らかなので、「をちかた人にもの申す」と花の名を聞かれたことに対して、「あなた様の光で輝いて見定められないのですが夕顔の花だと思います」と控えめに答えた歌なのです。そもそも、源氏のつぶやいた「をちかた人にもの申す」の歌には返しの歌がありました。先の※の返しの歌「春されば……」で、「名のるべき花の名」と言っています。この場合は、名を名乗ってほしいと求婚されたのに対して、簡単には名乗れませんと答えているのですが、この歌においてもまた「春一番に咲く」梅の花を詠んでいました。夕顔は、この旋頭歌に倣って「心あてに」の歌で花の名を答えましたが、自分自身の名前は最後まで名乗りませんでした。

ＡＢＣの説では、「心あてにそれかとぞ見る」という上の句の意味を誤解していましたが、下の句の「白露の光そへたる夕顔

の花」という光景について想像が足りなかったのです。光そへたる夕顔とは、ただ花が美しく見える光景ではありません。

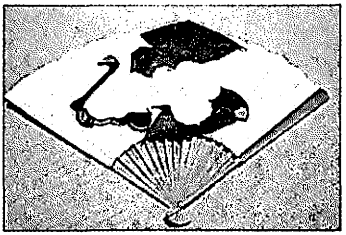
図⑦光・夕顔

図⑧たそがれ・夕顔

白い花に白い光が当たるとどうなるでしょうか。図⑦の写真は、フラッシュ撮影したものです。緑の大きな葉はよく見えますが、白い花は光が反射して花の陰影が見えません。これでは夕顔の花かどうかわかりませんね。

一方、図⑧の写真は夜、フラッシュなしで撮影したものです。暗くて少しピントがぼけていますが、源氏が返した、

寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔



図⑨白い扇・夕顔

という状態に一致しています。白い扇に夕顔の花（写真）をのせると、図⑨の写真のようになります。決して夕顔の花が引き立つものではありません。夕顔という女君は、白い扇という小道具を使って、歌に詠んだのと同様の、白い花が目立たない光景を表したのです。

江戸時代の陶芸家・尾形乾山は、この夕顔の花の風情を黒茶碗に描いています（大和文華館蔵＊89）。そこに白い文字で書かれたのは、十五世紀の学者、三条西実隆の歌「寄りてだに露の光やいかにとも思ひもわかぬ花の夕がほ」です。下地が白では目立たない、夜の闇を表す黒でこそ映えるのが夕顔の花だということをよく示しています。これとは逆に、夕顔という女は、白い花をあえて白い扇にのせて贈ることで、白露の光そへたる夕顔という光景を表そうとしたのです。

この出来事から二十数年後、源氏もまた、白い紙にあわ雪を詠んだ歌、

なか道にへだつるほどはなけれども心みだるるけさのあはを書いて、白梅を添えて女三宮に贈りました。源氏物語の世界は華やかできらびやかなものと思われがちですが、実は、本来

雪（若菜下巻）

の雅というのは、後世の侘びやさびにつながる控えめな風景を言うものだったと思います。

3．実証的作品論と書誌学的研究

帚木・空蟬・夕顔と続く三巻は、帚木三帖とも呼ばれていますが、すべて「身分違いの恋」を描いています。この三巻は、光源氏の恋愛失敗談を描いた巻々であると同時に、高貴な男に愛された身分の低い女の嘆きを描いた物語でもあります。そして、「白露の光と夕顔の花」という風景は、光源氏と夕顔との身分違いの恋を象徴的に表しています。新書『光源氏と夕顔』では、光源氏が単なる女たらしではないことを、他の歌からも論証し、諸説がどのような経緯で作られていったかという歴史も述べました。そこでは、『湖月抄』に宣長説などを加えて活字化した『増註源氏物語湖月抄』に頼って研究してきた近代の源氏物語研究の弊害についても指摘しています。私が夕顔の歌の解釈に疑問を抱いたのは、日ごろから『湖月抄』以前の版本に接していたからです。また、より実証的に解釈し得たのは、和歌を実証的に解釈する方法を学んでいた大阪女子大学の学問伝統があったからだと思います。斐文会講座の最後にこの夕顔論を紹介しましたのは、その基盤となる作品論と版本書誌学という研究方法が、斐文会会員の皆さんが学ばれた大阪女子大学の学統と深く関わっていることの端的な例だからです。

以上で、講演を終わらせていただきます。遅い時間までおつきあいくださり、ありがとうございました。

本稿は、二〇〇八年十一月十七日、大阪女子大学の同窓会・斐文会の主催した「晩秋の斐文会特別講座」（場所・大阪府立大学学術情報センター）における講演録を基に、部分的に修正を加えたものです。講演の休憩時間には、大阪府立大学（元大阪女子大学所蔵）の所蔵資料を会場に展示するとともに、同図書館で開催中の展示目録を配布して一冊ずつ具体的に説明しました。借用を許可してくださった大阪府立大学学術情報センター図書館と、借用してくださった青木賜鶴子氏に感謝いたします。

講演では、京都文化博物館において開催された「源氏物語千年紀展」（二〇〇八年四月二十六日～六月八日）および「読む、見る、遊ぶ 源氏物語の世界」（同十月二日～十一月十六日）で展示された作品をスライドで紹介しましたが、本稿では、その代わりにそれぞれの図録の作品番号を示しました。

【参考文献】

『源氏物語千年紀展』図録（京都文化博物館、二〇〇八年）総論・コラム・名場面鑑賞・図版解説など
『読む、見る、遊ぶ 源氏物語の世界』展図録（京都文化博物館、二〇〇八年）各論・コラム・参考文献
『源氏物語の風景と和歌』（和泉書院、一九九七年　二〇〇八年に増補版）
『源氏物語版本の研究』（和泉書院、二〇〇三年）
『絵入源氏　桐壺巻・夕顔巻・若紫巻』（一九九三～二〇〇二年、おうふう）
『光源氏と夕顔―身分違いの恋―』（新典社新書、二〇〇八年）

（しみず　ふくこ・帝塚山大学教授）